

巻頭言

学会誌委員長就任挨拶

～二つの長～



竹田 仰
九州大学

このたびの東日本大震災にて被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、会員の皆様の中には、お勤めの大学や研究機関、会社などの職場の被災で、研究や仕事に差し障りが生じておられる方も多々おられることと思います。一刻も早く復帰されますことを心より願っております。

この 4 月より当学会の学会誌委員長を拝命しました。歴代の委員長の学会誌に注がれた熱い思いを継承し、さらなる努力をする所存であります。

1. 書籍のこと

ところで、6 年前の平成 17 年 3 月中旬に、23 年間住んでいた長崎から引越して福岡に来ました。既に、九州大学の研究室には雑誌、会誌、書籍などを詰め込んだかなりの数の段ボール箱が先に届いており、早く開封して整頓しないと 4 月からの授業に差し障るので 20 日の日曜日に一人出て、図書館にあるような天井まで届くほどの棚に本を入れておりました。そこへ突然の激しい揺れが数十秒は続いたと思うのですが、パラパラと本が落ち始め必死で本棚が自分の方へ倒れて来ないように支えるのがやっとでした。この地震を今ネットで調べると、福岡県西方沖地震と言ひ、最大震度 6 弱、マグニチュード M7.0 とあります。過去にこれ程の地震に遭遇したことはなく、心底地震は恐いと体感しました。しかし、今回の大地震は、こんな規模どころではありませんし、津波が襲って来たわけですから想像を絶してしまいます。それで、このときにすぐにしたことが、そびえるような本棚の固定でした。それからちょうど 1 ヶ月後の 4 月 20 日朝早く、再び震度 5 強、M5.8 の地震が来たのでした。この本棚は、スチール製で横幅 90cm 高さは 2m70cm ありまして 10 架購入し、部屋の壁に幾つかに分けて連結して使っていました。地震となると、研究者にとっては書籍や書類が多いので、本棚転倒、書籍の散乱、そして私もそうでしたがちょっとしたお土産品や珍しいモノを本棚の前面の崖っぶちに置いているのが、一番先にぶっ飛び木端微塵ということがあったことと思います。

2. 二つの仕事

ところで、現大学での定年があと 2 年と迫って来ましたが、この膨大な本をどう片付けて身軽に出て行くかと考えるようになりました。前任校では、11 月半ばに転出が決まりましたが、卒論や修論の世話や業務の引き継ぎなどで、片付けを始めたのは 2 月からでした。このとき、家の引越しも同時進行でしたから毎日深夜までの作業となりました。23 年間一度も大学の健康診断を受けなかった私は、九大に出す診断書に見慣れぬ「高脂血症」と書かれ、医者から運動するようと言われましたが、もの見事に毎日の本やガラクタの片付けで福岡に移ったときには 6kg は減ってスリムになっていました。

このような過酷な経験から、この 4 月から整理を始め、平成 25 年 3 月までにはすっきりときれいにして出て行こうとプランを立てました。というのは、次に持って行く職場もなく真剣に取捨選択し、寄贈、業者買取り、自宅用、廃棄など決めないといけないからです。九大には〇〇先生寄贈書籍というコーナや分室があり、若い頃からその道の研究一筋に集められた貴重な本の数々が厳かに陳列されています。ああいう方を大先生と呼ぶのだなと思うわけですが、私の方は、マンガ、小説、音楽の CD、映画の VHS テープ、専門書などごちゃまぜで、わが紆余曲折の人生をそのまま表しているようで、丸ごとの寄贈はありえません。

こういうわけで、2 年の間に無理せずゆるやかに撤退作業プランを練っているところに、試練が来たのです。

この4月から、この学会誌編集の委員長の仕事、次に九州大学の総合研究博物館の館長に就任し（おまけに来年のヒューマンインタフェース学会のシンポジウムの大会長も）、つまり、定年まで「長」の名のつく役職が二つも来たのです。これらの長は、超VIPな長ではありませんから秘書なぞ望むべくもなく、2年後の3月頃には、またしても深夜までの激しい撤去作業に明け暮れ、疲労困憊して去って行くことになりそうです。

3. 挑発と夢想

ここで、学会誌委員長ということと博物館長ということを考えてみると、非常に面白いことに気が付きました。つまり、博物館は「モノ」に関する仕事、学会誌は「コト」に関する仕事となり、私は「モノ」と「コト」の二つの長を手に入れたのかと前向きに考えようとなったのです。九州大学の博物館は、植物、昆虫、岩石、化石、人体骨・動物骨などの標本数が750万点あるとも言われ、国内の大学では随一の規模です。箱崎キャンパスに所蔵の縄文・弥生人骨はキャンパスで見かける学生数より多い3～4千体あると言われています。これらのおびただしいモノは、きちんと保管して公開展示しなければいけません。大学におけるモノの管理は、今回の地震により今後見直しなどの業務が厳しくなると思われます。

ところで、モノがあるとどうしても、どこから来たのか、何の目的で使われたのか、その仕組みはどうなのかなど知りたくなります。一方、会誌にHMDの由来や仕組み、活用方法を記述しても、やはり実際に被ってみたいくなります。そこで、「モノはコトを挑発し、コトはモノを夢想する」というキャッチフレーズを思い付きました。このように、モノもコトもお互いが綿密に繋がりがあって本当の知識が身に付いていくのだと思います。最近、ある人に、「長唄、常磐津、浄瑠璃、端唄、浪曲、新内、小唄、清元、・・・って邦楽の放送でよく聞くけど、どう違うのか素人に分かりやすく教えて」というと、困っ

た顔をして得々と説明が始まりましたが、さっぱり分かりません。しかし、説明の中に「唄」と「語り」という語句が出てきました。これは、全くの素人考えですが、「唄」に込めて気持ちが表され、「語り」によって状況が説明される。唄がモノで、語りがコトのような関係で、しかもその比重が「唄」に重きがいく場合もあれば、「語り」に傾くときもあり、それが邦楽の多様なバリエーションを起こしているなどと、一人怪しげなことを考えています。

4. おわりに

学会誌は論文誌と異なりコトの緻密さよりは、広く会員の心をつかみ、今流行りの技術をお知らせしたり、研究室の紹介や対談を企画して先生方の顔が見えるようにするので、この点ちょっと先の「唄」の部分に似ています。「うたは世につれ世はうたにつれ」と申します。するとさながら論文誌は「語り」のようなものでしょうか。従って、学会誌を親しみながら見ていただき、会員の親睦と研究のヒントになるように紙面作りをしなければと思っています。このように、モノとコトのことを考えているうちに、この二つの間にVRが介在すれば、モノとコトは親和性をより深く帯びて、上手く機能するのではと思いつきました。例えば、会誌のこのページの冒頭の写真に、私が怪しげなものを掴まんで眺めているのですが、これをPC上のWEBカメラにかざすと、このヤマネコの頭蓋骨がみなさんの方に向けて「巻頭言読んで下さり感謝ですー」とパクパクさせて喋るとかすると、おっ！さすがVR学会誌となるのではないのでしょうか。そのようなことを夢想しております。

【略歴】

竹田仰 (TAKEDA Takashi)

1948 山口県萩市生まれ。1972 年九州芸術工科大学音響設計学科第1期卒業。1991 年長崎大学大学院後期博士課程修了。1972～1982 年九州松下電器開発研究所勤務。1982 年4月より長崎総合科学大学勤務。同大学人間環境学部教授を経て、2005 年4月より、九州大学大学院芸術工学研究院教授。バーチャルリアリティの研究に従事。日本バーチャルリアリティ学会理事、ヒューマンインタフェース学会評議員、電子情報通信学会、映像情報メディア学会各会員、工学博士。